

平成 31 年度入学者選抜学力検査問題

(後期日程)

小 論 文

〔 人間社会学域
人文学類 〕

(注 意)

- 1 問題紙は指示があるまで開いてはいけません。
- 2 問題紙は本文 6 ページです。答案用紙は 4 枚あります。
- 3 答えはすべて答案用紙の指定のところに、横書きで記入しなさい。
- 4 アルファベット文字や数字は、1 マスに 1 字で記入しなさい。
- 5 マス目のある下書き用紙の様式は 25 字×34 行(850 字)です。
答案用紙の 1 行あたりの字数や総字数の指定とは異なる場合があるので、注意して利用してください。
- 6 問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

I 以下の文章は、1954年に発表された歴史研究者・上原専祿(うえはら せんろく、1899-1975)の論文「世界史像の新形成」の一節です。この文章を読んで、問1、問2に答えなさい。

問1 下線部(1)について、著者は「新しい世界史像」はどのように描かれるべきであると主張していますか。400字以内で説明しなさい。

問2 あなたが歴史研究者なら、下線部(2)が示している課題をどう解決しますか。著者の考えをふまえながら、400字以内で述べなさい。

歴史研究者が現代の日本人の問題意識を踏まえて世界史像の形成の仕事に立ち向かう場合には、新しく形づくられた世界史像というものは、一時代前の学者や歴史家によって造形されたそれとは、構造の点でも、動機づけの点でも、必然的に異ならざるをえないだろう。なぜなら、歴史像というものは、いつでも、時代に生きる歴史家の問題意識の造形的表出に他ならないからである。

こうして、第二次世界大戦後の新しい世界の中に、太平洋戦争後の日本をどう定位させればよいか、その定位の問題とからみ合って日本の内部をどう再構成すればよいか、という両面の問題に苦しむ現代の日本人の問題意識を造形化したものとしての新しい世界史像は、だいたい次のような構成をとらざるをえないだろう。

(1) 現代の日本人は、今述べたように、第二次世界大戦後の新しい世界の中に、日本
(2) をどう定位させればよいか、という困難な実際問題を担っている。ところで、この新しい世界そのものは、第一次世界大戦までのヨーロッパを中心とし、それを支配者または少なくとも指導者とした古い世界に代わる一体化された世界である。もとより、古い世界も地表上のあらゆる民族を含んだ——または含ませようとする——一体化された一つの世界ではあった。しかしながら、その世界はヨーロッパの意志によって統括され、ヨーロッパの生活原理によって一貫された一つの秩序に過ぎなかつただろう。そうしたヨーロッパ的秩序としての古い世界の在り方に根本的変革が加えられたもの、一体化の方式に原理的転換が行われたもの、それが新しい世界の一つの基本的特徴であろう。こうして、新しい一体的世界が、古い一体的世界の構造変化として捉えられるとすれば、より根本的な問題は、総じて一体的

世界というものが、この地球上に、いつ、どうして出現したか、という問題であろう。この問題は、観念としてではないところの、現実としての世界史が、いつ、どうして始まったか、という問題と、同じ問題である。

こうした観点に立つて人類の歴史的歩みを大きく展望すると、ヨーロッパ的秩序としての一体化された世界が出現するまでに、少なくとも東アジア世界、インド世界、イスラム世界、ヨーロッパ世界の四つの世界が、それぞれ固有の文化と生活様式をつくり出し、それぞれ独自の歴史を展開させていったものとして、展望するものの注意をひくだろう。それらの世界相互の間に、政治的・経済的な交渉がなかった、というのではない。また、それら相互の間に、文化の交流や摂取が行われなかった、というでもない。それらの間に存した交渉や交流の意義はけっして軽視さるべきではない。それにもかかわらず、それらの世界は、結局、それぞれ別個の世界であった、と見ねばなるまい。それだけに、地理上の発見※によって準備され、資本主義の発展によって動機づけられたところの、ヨーロッパによる諸世界の統括と支配というかたちの下に一体化された世界の形成という事態は、人類の歴史における真に新しい、そして根本的に重大な事件と判断されなければなるまい。人類は、このときから、一体化の密度をたかめてゆく「世界史」において生きはじめたのである。また人類は、このときから、共通の問題として、特に資本主義の問題というものを担いはじめたのである。

ところで、人類の歴史におけるこれらの事態を、現代の日本人にとっても基本的に重要な事実関係として重視するとすれば、新しく描き出されてゆく世界史像においては、まず何よりも、これらの事実関係が、その重要さにふさわしいかたちで、表現されねばなるまい。そうすると、叙述の第一段では、東アジア、インド、イスラム、ヨーロッパの諸世界が、それぞれ、どうして形成され、そこでどのような歴史的展開が行われたかが言い現わされねばならないだろう。人類の歴史におけるこの段階では、多少とも厳密な意味では、一体としての世界史というものは存在しなかった。したがって、人類の歴史におけるこの段階で、すでに一体化された世界というものが存在していたかのような想定に立つ叙述様式は避けられねばならぬだろう。叙述の第二段にいたって、はじめて、一体化された世界の歴史について記述が行われるべきだろう。すなわち、はじめには、そのような世界史がどうして成立し

たか、つぎには、それがどう展開したかが記述され、そして最後に、その展開の新しいかたちとして、現代が考察されなければなるまい。その現代において、ソヴィエトとアメリカがどういう在り方をしているか、また、あの四つの世界があらためてどのような在り方をとり始めているかを検討することによって、現代の歴史的特徴と問題情況とが、同時に明らかにされうるだろう。

新しい「世界史像」は、人類の発生や文明の発端について注意を払う「人類史像」である必要はないだろう。従来の世界史像においては、しばしば、人類の発生や文明の発端についても記述が行われた。この記述様式は、超越的にまた先験的に一つのものと考えられた人類の運命を、その起源から終末にかけて見通そうとするキリスト教の歴史観、そのまた影響下に構想されたヨーロッパの歴史哲学に由来することが多いだろう。人類の起源を明らかにし、文明の最初の形成について考えることは、キリスト教的歴史観や歴史哲学の問題意識の外に立った場合にも、なおかつ興味あることに違いない。しかしながら、第二次世界大戦後の現代世界の問題情況と、それとからみ合った日本の歴史的境位を解明したいという実際的要求に対応し、それから出発して世界史像の新造形を意欲する立場からは、人類の起源のごときものは、その終末と同様に、あえて問題とはならないだろう。世界史像と人類史像とは、どうかすると混同されるが、その混同を避けることが、現代への問題意識から出発して世界史像を新しく形成する試みにおいては、特に望ましいのではないか、と思う。

（上原専祿「世界史像の新形成」『上原専祿著作集 第八巻 世界史像の新形成』上原弘江編，評論社，1993年，55ページから58ページ[初出：1954年10月]。問題作成の都合上，原文の一部を改めた。）

〔出題者注〕

※ 15世紀から17世紀初めにかけての、ポルトガル、スペインに代表されるヨーロッパ諸国による、新航路開拓や「新大陸発見」のこと。これらの動きがあった時代を「大航海時代」ともいう。

Ⅱ 以下の文章はブラジルで発行されている日本語新聞に掲載されたコラム記事です。ブラジルには1908(明治41)年以来、約百年の間に十数万人の日本人が移民し、その子孫である日系ブラジル人は百数十万人に達すると言われています。この文章を読んで、問1、問2に答えなさい。

問1 下線部(1)「翻訳」について、筆者の意見を参考にしながらあなたの考えを600字以内でわかりやすく述べなさい。

問2 下線部(2)について、筆者は、どのような状況を述べているか。「臨界」の意味をふまえつつ400字以内で具体的に記しなさい。

「言葉」というのは不思議なもので、本人がしっかり理解していないと相手に伝わらない。以前、分かりやすい解説で有名なジャーナリスト池上彰が、こんなことを言っているのを聞いてガッテンした。

「後輩がニュース原稿を読んだのを聞いて、一カ所だけ意味がとれないところがあつた。後から『あの部分はどういう意味だったの』と確認したら、本人も『やっぱり伝わっちゃいましたか。実は僕も原稿のあの部分だけ、意味が理解できていなかったんです』と告白した。やっぱり自分が理解していないままアナウンスしても、相手に伝わらないんですね」。つまり、たんに言葉として発音するのと、意味を分かって口にするのでは雲泥の差がある。

日本の外国語大学のポルトガル語学科を卒業した若者と話す機会が時々あるが、発音が良かったり、難しい言い回しができたりする反面、ブラジルの歴史や文化、人物、社会の仕組みを知らないのにあきれることが度々ある。

試しに、彼らに当地の新聞を訳してもらおうと、単語を機械的に置き換えているだけで文脈を理解した文章になっていないことが多い。さらに日本語自体がオカシイことも多々あつた。いくら大学で勉強して文法に詳しくなつたところで、実際のブラジル社会を知らなければ本当の「理解」は不可能だ。それ以前に日本語文章能力が満足でないものに翻訳はムリだ。

(1)
同じことが「外国理解」にいえろ。日本語や日本の歴史や文化を知らずして、外国のことを理解しようとしても限界がある。その人が日本を理解しているところまで

しか、外国理解は進まないからだ。まずは母語である日本語で日本に関する論理的な認識能力をたたき上げることが重要だ。それが無いのに、一足飛びに外国語を勉強しても、どちらも中途半端になる。

物事を理解するには順序がある。急いでいるからと、それをすっ飛ばすと「わかったつもり」にしかならない。そこでいつも思うのは、日本における「日本移民や日系人の存在の軽さ」だ。

血統や国籍、人種、文化変容というものを考える場合、日本人と外国人の中間にるのが移民や日系人だ。日本では外国人や外国文化、移民や難民を理解しようとするとき、日系人をすっ飛ばして、いきなり外国人を理解しようとする傾向が強い。

なぜ柔道や剣道が延々と型を繰り返し練習するのか、茶道や華道が基本形を大事にするのか。そこには「筋道」があるからだ。外国理解“道”の先達は移民諸氏であり、彼らに耳を傾けるのが一番早い上達法だ。この問題には二世、三世先を見る視線と忍耐がないと、身体にしみ込んだ深い認識にならない。

移民家族こそが「日本人の臨界※」だと常々思う。移民の家庭においては、同じ血筋の中に外国人である子や孫がいて、国籍も違えば言葉も文化も異なる。でも「家族」の絆でつながる。その家庭環境の中で、どのように親の文化が子孫に広がり、現地文化や考え方が親に浸透していくのか。一世はどんな心理過程で現地適応していくのか、また二世はどんな葛藤を抱えるのか。そんな現地化の過程を一つ一つ解き明かし、理解する営みの先にこそ外国人理解があると思う。

日本人が理解するのに、最も身近で分かりやすい事例が日本人自身のはず。日本人が外国に適応していくプロセスを理解せずして、外国人の日本適応を肌感覚で理解できるのか。それらは鏡返しの現象だ。なのに日本には多文化共生や外国文化研究の学者はいっぱいいても、日本移民史やその移住プロセス研究者は少ない。その日系人不理解が外国人政策にも反映されている。

うがった見方をすれば日本の学者や官僚らは、途上国に住む南米日系人を下にみて「学ぶものなどない」とし、いまだに「脱亜入欧」よろしく欧米事例にこそ先進事例がある——との先入観を持っていると感じる。

“足元”たる日本移民の歴史を知らないのに、ドイツのトルコ移民の実態やアメリ

カの中南米移民政策を調べて、そこから日本への外国人移民導入のヒントを探るなど噴飯ものだ。「多文化共生」を金科玉条にしている NGO は欧米視察に行く前に、まずブラジル日系社会を体験しに来るべきだと思う。

(深沢正雪「なにげない移民家庭こそが「日本人の臨界」」, 『ニッケイ新聞』, 2016 年 9 月 13 日, 「樹海」欄。問題作成の都合上, 原文の一部を改めた。)

[出題者注]

※ 臨界：さかい, 境界のこと。